再帰代名詞の換喩、提喩、隠喩について：認知言語学的アプローチ

―（その２）：隠喩と換喩の相互作用とその認知メカニズム―

鄭　　基成

１．序

第一部における換喩、提喩、隠喩の定義をめぐる議論に引き続いて、第二部では、再帰代名詞を中心とした人間名詞句 (Human Noun Phrase=HNP) [1] の換喩（メトニミー）機能に焦点を当てて、その認知的特性とメカニズムを探っていく。まずLakoff (1996) における再帰代名詞の隠喩としての取り扱いを取り上げ、Lakoffが区別したSubject/SelfのうちSelfのメトニミー機能について述べる。次に吉田 (2003) による再帰代名詞のメトニミー機能に関するいくつかの論点を紹介する。つぎにメトニミーの認知的メカニズムについて、Lakoffその他の概念メタファー理論、Langackerの認知文法におけるイメージ・スキーマ理論、さらにFauconnierその他のメンタル・スペース理論におけるブレンド理論を比較検討しつつ、ある種の統一的結論を見出したいと思う。

2. Lakoff (1996)

Lakoff (1996) は英語の再帰代名詞の意味の解明に際し、まず人間 (person) という概念を主体 (Subject) と自己 (Self) に区別した上で、主体と自己とのメタファー的関係性において浮かび上がってくる自己 (Self) の概念化、すなわちわれわれ人間とは何か、そして自己はどのような機能を持ち合わせているか、についてのわれわれ自身の理解、に関して詳細に述べている。通常再帰代名詞はその主体をあらわすといわれるが、以下の例に見るように必ずしもそうではない。Lakoff (1996) からの例文をいくつか挙げる。

(1) If I were you, I'd hate me.
(2) If I were you, I'd hate myself.

(1) の‘me’が条件節の主体 ('I') を指示するのに対して、(2) のmyselfは主文の主体 ('I') すなわち条件節の‘you’と共指示関係にある。つまり、形式論理における意味論が主張するようにX (subject) is X (self) ではないのである。同様に例文 (3) - (6) における再帰代名詞はその先行詞である主体と同一の人物全体を指示するものではない。それぞれの再帰代名詞は体系的な内部構造を持った、主体とは違った自己の多様な側面のひとつを表している。

『人文コミュニケーション学科論集』2, pp.223-240.
© 2007 茨城大学人文学部（人文学部紀要）

(3) You need to step outside yourself.
(4) I'm beside myself.
(5) I'm not myself today.
(6) I lost myself in writing.

Lokoffによる再帰代名詞の意味分析は、彼の概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory) の枠組みにおけるメタファーによる分析である。それは二重のメタファー分析から成り立っている。

1)「分割された人間」のメタファー(the Divided-Person metaphor)
2)「投影されたー主体」のメタファー(the Projected-Subject metaphor)

まず、1) の「分割された人間」のメタファー (the Divided-Person metaphor) は単一の存在物である一人の人物は 2 つの別々のグループの存在物として理解されることを意味する。Lakoffはこのメタファーを次のような写像関係 (mapping) で規定する。

ⅰ）人間はいくつかの要素を組み合わせたもの (ensemble) である。その中には、一人の人間、ひとつの主体 (Subject) 、少なくとももうひとつの存在物、すなわち自己 (Self) が含まれる。

主体 (Subject) ：主観性、意識や感情、判断、意思、感受能力などが帰属するところ。
自己 (Self) ：身体的特徴や部分、社会的役割、過去における行動、記憶、名前、宗教的所属など。

ⅱ）経験しつつある意識は主体にある。
ⅲ）自己を構成するものは人間の身体的側面や機能的側面である。
ⅳ）主体と自己の関係は空間的関係である。すなわち主体は通常自己の内部にあるか、自己を所有するか、自己の上部に位置する。

すなわち、ここでは主体は自己をコントロールするものと考えられており、主体は判断するが、自己のように世界の中で直接機能することはできない。また主体は常に意識や主観的経験、知覚、判断が存在する場所である。それに対して自己は、主体とは違った人間全体の諸側面、すなわち身体、感情、過去の歴史、社会的役割、その他多くの側面からなる。上記の例文以外にも以下のものがあげられている。

(7) You should take a good look at yourself.
(8) I've been observing myself and I don't like what I see.

ちなみに、これらの例文にはKNOWING IS SEEINGというメタファーが同時に働いている。

次に 2) の「投影されたー主体」のメタファー (the Projected-Subject metaphor) は、ある主体が、ある仮定的状況において、他人の自己に投影されること、すなわち主体の客体化を意味している。ゆえにこれをLakoffは「客観的―主体」のメタファー (The Objective-Subject Metaphor) とも名づけている。そして次のような一連の写像関係 (mapping) で規定している。

ｉ）自己は主体の容器である。
ii）主観的であるということは自己の内部にとどまっていることを意味する。
iii）客観的であることは自己の外側に出て行くことを意味する。

このメタファーは自己の主体との関係におけるさまざまな側面についてのメタファーである。代表的な例を挙げれば次のようなものがある。

THE LOSS-OF-SELF METAPHOR: *I was seized by a longing for her. I got carried away. He's in the grip of his past.*

THE SPLIT-SELF METAPHOR: *I keep going back and forth between my scientific self and my religious self. He's at war with himself over who to marry. He's conflicted.*

THE REAL-ME METAPHOR: *I'm not myself today. That wasn't the real me yesterday.*

THE GENERAL INNER-SELF METAPHOR: Her sophistication is a façade. You've never seen what he's really like on the inside.

THE SCATTERED-SELF METAPHOR: *Pull yourself together. He's all over the place. He's not focused.*

以上Lakoff (1996) による再帰代名詞のメタファー理論による意味分析を概観した。Lakoffは上記二種類のメタファーによって分析を試みており、十分な説得力を持っているが、以下においてその問題点を指摘する。

3. 自己 (Self) のメトニミー構造

Lakoffが主張するように自己は主体との関係において種々のメタファーを通して表現される。しかし表現されるもの、すなわち自己の諸側面はメタファー関係であるよりもむしろメトニミー機能によるものと考えたほうが自然である。つまり、上記の例ではまず自己の諸側面がメトニミー機能によって分解され、それら個々の側面が主体とのメタファー関係によって表されている、といえるのではないだろうか。ここで再帰代名詞を含む人間名詞のメトニミー機能についてまとめておこう。

まず、メトニミー機能は大きくは ｉ）隣接性 (contiguity) によるメトニミーと、ii）全体と部分 (whole-part) の関係によるメトニミーがある。ii）の機能はシネクドキー（提喩）の一部の機能、すなわち現実世界に関する全体と部分の関係を引き継いだものであることは、第一部でも述べた。この関連でLakoffによる再帰代名詞の分析に関して指摘しておきたいのは、自己のメトニミー機能のうちもっぱらii）の全体と部分の関係のみが関心の的となっており、ｉ）の隣接関係については考慮されていないことである。Lakoffのメタファー分析については後に再び触れる。

ｉ）隣接性によるメトニミーとは、非常に広い概念であって、あるものと何らかの状況において縁故関係にある多くのものの指示関係のことを言い、そのすべてを列挙することはおよそ不可能なくらいである（佐藤 1986. 153f. 参照)。隣接関係の基底 (vehicle) －ターゲット(target) の代表的関係としては、従来以下のものがよく取り上げられる。
1) 製造者―製造物、2) 場所―出来事、3) 場所―機関、4) 場所（産地）－産物、
5) 入れ物―中身、6) 原因―結果（双方向)、7) 抽象物―具象物（双方向）など。

ii）部分―全体のメトニミー関係もきわめて多岐にわたるものがある。(人間の自己についてはLakoffが示したとおりである)

瀬戸 (1997) による以下のようなメトニミー機能の分類もある[2]。

メトニミー：①空間：全体―部分；入れ物―中身；一般的隣接
②時間：出来事（全体―部分)；原因―結果
③抽象：特性―対象

後述のように再帰代名詞に関するメトニミーに関する限り、隣接性と全体―部分という大分類が有効かと思われる。

次にこのことを再帰代名詞を含む人間名詞句について具体例をあげながら見てみよう。吉田 (2003, 46) は人間名詞句が空間的隣接性、時間、コミュニケーション（発話)、身体とその

部分を指示するメトニミー機能について例示した後に、再帰代名詞について、「再帰表現を用いた文を適切に収集し、分類すると、人間名詞句がメトニミー機能によりその人間自身以外のものを指示する範囲を、ほぼ全体的に、示してくれるように思う。」と述べている。Lakoff による例と重なるものも含めて、いくつかの例を引用する。

空間的隣接性：

(9) Elizabeth ordnete sich in den Verkehr auf der Sechsten Strasse ein.（エリザベス（＝乗り物）は六番ストリートの車の流れに合流した。）

(10) Ich muss mich neu einrichten.（私は（＝部屋/アパートに）新しく家具を調えなくては。）

身体の全体と部分：

(11) Er setzte sich auf den Stuhl.（彼は椅子に腰をかけた。）

(12) Sie legte sich auf dem Bett. (彼女はベッドに身を横たえた。)

(13) Sie wusch sich.（彼女は顔/手を洗った。）

(14) Er beugte sich höflich.（彼は慇懃に腰かがめた。）

(15) Sie kämmte sich in Ruhe.（彼女はゆっくりと髪をとかした。）

(16) Anna hängte sich bei mir ein.（アナはわたしと腕を組んだ。）

コミュニケーションあるいは発話：

(17) Er äusserte sich nichts zu dieser Angelegenheit.（彼はこの件について発言を控えた。）

(18) Sie fasste sich nur kurz.（彼女は手短に話をした。）

(19) Die alte Frau widerholt sich in letzter Zeit.（老婦人は近頃繰り言を言う。）

心理的側面：

(20) Er hat sich anders überlegt.（彼は考えを変えた/気が変わった。）

(21) Sich hat sich geirrt.（彼女は思い違いをした。）

感情：

(22) Wir haben uns sehr über das Geschenk gefreut.（贈り物を心からうれしく思いました。）

(23) Sie ärgerte sich über seine Bemerkung.（彼女は彼の言葉に腹を立てた。）

(24) Das Paar amüsierte sich den ganzen Abend beim Tanz.（二人は一晩中ダンスをして心を楽しませた。）

(25) Er störte sich nicht an meiner kritischen Bemerkung.（彼はわたしの批判的な言葉に気分を害することもなかった。）

意思決定：

(26) Haben Sie sich schon entschlossen, Sir?（注文の料理はお決まりですか。）

(27) Sie konnte sich nur schwer entscheiden. (彼女はなかなか決心がつかなかった。)

（以上吉田 (2003、47－48)

（なお、吉田 (2003、36) は、これらの文例における日本語訳において見て取れるように、ドイツ語が人物全体に表現の主眼を置くのに対して、日本語ではその部分に当たるものを主眼にして表現するという、対照言語学的に非常に興味深い点を指摘している。）

このほかにも以下のような側面が考えられる。たとえば記憶に関するものとしては、(28) などがある。

(28) Ich kann mich genau an jene Tage erinnern. (わたしはあのころのことを鮮明に思い出すことができる。)

再帰代名詞sichのさまざまなメトニミーの内容は、そのつど、特定の動詞の介在によって引き起こされる主体と自己の関係において発生するものであることは言うまでもない。

このように、再帰代名詞のメトニミー機能は隣接性によるものと人間の身体的および精神的な部分に及ぶものの多様な側面に及ぶことが見て取れる。上記以外にも、名前、人格や人間性、状況や行為、経験なども含まれる。(29) におけるスケジュール（予定）は来るべき（仮想の）経験と解釈される。

(29) I can’t catch up with myself.（自分のスケジュールどおりに行かない）(Fauconnier, 1997, 179)

4. メトニミーの認知的メカニズム：賦活化によるアクセスか写像か?

2. と 3. で見てきたことからいえることは、再帰代名詞を伴った表現の意味の形成にはメタファーとメトニミーが同時に働いているということである。すなわちLakoffによる主体 (Subject) と自己 (Self) との関係はメタファー関係であり、一方、動詞や状況からの要請による自己の特定的な側面の選択は再帰代名詞におけるメトニミー機能によるということである。そこで本節ではメトニミー的意味の成り立ちに関してその認知メカニズムについて考えることにする。

認知言語学において、現在メトニミーの認知過程に関して大きくは二通りの理論的見地が存在する。ひとつはLangacker (1987, 1999) に代表される認知文法 (Congnitive Grammar) の立場からの賦活化 (activation)・アクセス (access) の理論であり、もう一方はTurner & Faucon-

nier (2000) およびFauconnier &Turner (2002)、 Lakoff & Turner (1989) などの写像プロセス (mapping process) の理論である。以下、順次それぞれの考えの骨子を見ていこう。

4.1 Langacker (1987, 1999)における参照点(reference point)とアクティブ・ゾーン (active zone)

メトニミーはある表現にまつわるわれわれの百貨辞典的知識 (encyclopaedic knowledge) のうちのある特定のものがわれわれの認知的現在において賦活化される現象であるというのがLangackerの主張である。

> "The centrality of a particular specification within the encyclopedic characterization of an expression is a matter of its relative entrenchment and likelihood of activation in the context of that expression. (Langacker, 1987 , Vol. 1. p. 159)

そしてメトニミー表現は参照点 (reference point) として機能し、それを通じてターゲットへのアクセスが可能になる。

> "...metonymy is basically a reference point phenomenon. More precisely, the entity that is normally designated by a metonymic expression serves as a reference point affording mental access to the desired target (i.e. the entity actually being referred to." (Langacker, 1999, 199)[4]

この参照点がLangackerの認知文法におけるプロファイル (profile=PR:その都度、ランドマーク (LM) あるいはトラジェクター (TR)、すなわち直接表現されている事柄であり、アクセスされるターゲットはアクティブ・ゾーン (active zone=AZ)、すなわち間接的に意図されている事柄である。たとえば (29 a-d)) の各述部に共通しているのは、それぞれプロファイルとアクティブ・ゾーンの指示対称に不一致が生じているということである。

(30) (a) We all heard the trumpet.
(b) Don't ever believe Gerald.
(c) I finally blinked.
(d) Bring me a red pencil.

(Langacker, 1987, 271)

(30a-d) のプロファイル (PR) とアクティブ・ゾーン (AZ) はそれぞれ次のようになる。

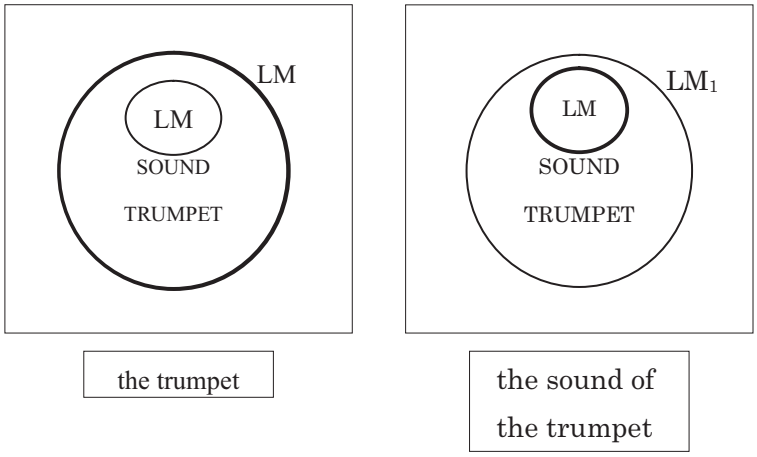
PR: the trumpet; Gerald; I; red

AZ: the sound; what Gerald says; eyelid; color sensation

たとえば (30a) では、trumpetという語が指し示すのはあくまでも物理的なモノであって、音ではない。しかし聴くという行為に関して、音はトランペットというPRのAZであり、実際に聴く対象である。(30a) は (31) のようにパラフレーズすることができる。

(31) We all heard the sound of the trumpet.

(31)では (30a) のAZ (=the sound) がPRとして顕在化されている。ここではPRとAZの一致が見られる。メトニミーによる意味の移動は、まさにこのPRとAZの不一致という「ずれ」によって説明される。その際、AZの理解（アクセス）はPRという参照点を通じて達成される。(図 1 参照)



(図1)

メトニミーに関するこのような説明はそのまま再帰代名詞のメトニミーについても当てはまる。また上記 3 で触れたドイツ語と日本語の傾向的な違い、すなわちドイツ語が人物全体に表現の主眼（＝プロファイル）を置くのに対して、日本語ではその部分に当たるものを主眼にして表現するという側面もこのような図式化によって明瞭になる[5]。

4.2　賦活化・アクセス理論と写像理論

Langackerのメトニミーに関する以上のような考え方を仮に概念の賦活化・アクセス理論と呼んでおこう。Barcelona (2000, 4) は、メトニミーの認知メカニズムについて、認知言語学において、二通りの理論的見地が存在し、そのひとつが非写像の見地 (non-mapping view) であり、もう一方が写像の見地 (mapping view) であるとし、Langackerの考え方が非写像の見

地を代表するものであると指摘している。

Langackerと同様の見方はKövecses and Radden (1998) においても見られる。かれらはLangackerの参照点 (reference point) の考えに基づいて、賦活化 (activation) を次のように定義している。

> “activation: a “cognitive process in which one conceptual entity, the vehicle, provides mental access to another conceptual entity, the target, within the same domain, or ICM” (p.39)[3]

一方、写像の見地はLakoff and Turner (1989) や、またTurner & Faucconier (1995) におけるブレンド理論 (blending theory) などに代表されるとBarcelona (2000, 13) は指摘している。Lakoff and Turner (1989) はメタファーと同様メトニミーも概念的写像とみなされている。

写像の見地と非写像の見地は本当に対立する理論なのであろうか。実際は両者は対立するのではなく互いに補い合う見地であり、見地の違いはよって立つ理論的枠組みの違いに起因するものと見るのが妥当と思われる。

たとえばRuiz de Mendoza (2000) もこのような両立的見方をしており、そのことをBarcelona (2000) は以下のように指摘している。

> “...the fact that metonymy is a type of mapping is not incompatible with the fact that it often consists of the “highlighting” or the “activation” of the target domain. A mapping is the projection of a domain or subdomain onto another domain or subdomain. In metonymy, the projection of the source simultaneously causes the mental activation of the target; but the mapping does take place. ” (Barcelona, 2000, 13)

第一部でも紹介したように、Ruiz de Mendoza (2000) でのメタファーとメトニミーの違いは、前者がドメイン間の写像であるのに対して、後者が同一のドメイン内の写像だということである。

またBarcelona (2000) の見解はLangackerの賦活化理論を採用しつつ同時に写像によるアクセスを主張している。

> “Metonymy is, in my view, a special case of what Langacker (1987:385-386) calls activation. The metonymic mapping causes the mental activation of the target domain, often with a limited discourse purpose.” (Barcelona, 2000, 4)

このようにLangackerの認知文法によって、メトニミーにおける全体と部分の関係および表現と隣接関係にある要素の関係についての認知的仕組みがある程度明らかにされた。しかし、「全体－部分」が、そして「表現―隣接関係にある要素」の意味の移動が具体的にどのような認知機構によって引き起こされるのかについてはまだ十分に説明されていないように思われる。次に検討するブレンド理論はこの問題に対する解決の方向を指し示していると思われる。

5. ブレンド理論

5.1 ブレンド理論におけるメタファーとメトニミー

ブレンド理論 (blending theory) はFaucounnierやTurnerなどによって進められているメンタルスペース理論 (Mental Space Theory) における中心的な認知概念である。メンタルスペース理論やブレンドに関する詳しい解説はここでは省くが[6]、ごく簡単に述べれば、その主張するところは次のようなことである。ディスコースの進行に伴う認知機構における概念的な写像プロセスにおいて、ソース・ドメインとターゲット・ドメインと従来呼ばれているもの―ブレンド理論では単にインプット・スペース (Input Spaces) ―はブレンド・スペース (blend space) に写像される。ブレンドスペースにおける概念構造はすべてがインプット・スペースからもたらされるものではなく、ブレンド内における新たに発生した構造 (emerging structure) における認知的運営によって生じる。第四のスペースとしてのジェネリック・スペース (generic space) は両方のインプット・スペースに適応する概念構造の骨格を内容とする。ブレンド理論はメタファーやメトニミーのみならず、広範な意味と文法の現象を説明するための理論と考えられている。

さて、Turner & Fauconnier (2000) ではメタファーとメトニミーの相互作用についてのブレンド理論による分析が示されている[7]。そしてFauconner & Turner (2002) では「枢要な関係要因」(Vital Relations) の圧縮 (compression) という写像プロセスの導入によってさらに充実した分析がなされている。圧縮の概念の適用もメトニミー現象に限定されるものではない。

まず、Turner & Fauconnier (2000) では、Lakoff & Kövecses (1987) における「怒り」のメタファー分析をもとに、それをさらにメトニミーのプロセスを加味してブレンド理論で分析をしている。具体的には以下のとおりである。

(32) God, he was so mad I could see the smoke coming out of his ears.

Lakoff & Kövecses (1987) ではANGER IS HEATというメタファーのひとつの発現形態として説明されるが、Turner & Fauconnier (2000) はこのメタファーが成立するためにはもう一つ目とにミーのプロセスが介在していると主張する。表 1 は (32) のメンタル・スペース構造を表したものである。

SOURCE	BLEND	TARGET	← (METONYMY)
Input 1	blended space	Input 2	Input 3
“physical events”		“emotions”	“physiology”
container	person/container	person	person
orifice	ears/orifice		ears
heat	heat/anger	anger	body heat
steam/smoke	steam/smoke	sign of anger	perspiration, redness

（表　1）Tuner&Fauconnier (2000,137)

(32)の「怒り」の感情 (emotion) は「耳からふきでる煙り」(the somoke coming out of his ears) という生理的反応として表現されている。しかしこの生理的反応の実際の出来事はターゲットにおけるメトニミーではなく、ソースから「煙」のような物理的現象として得られる。

一方、“*the smoke coming out of his ears*” というフレーズはソースの物理的なものも、またターゲットにおける生理的反応をなんら直接に表すものではない。それはブレンドにおいてはじめて起こりうることなのである。両方のインプットから情報が選択的にブレンドに投影され、そこでブレンド独特の新規なフレームを作り出している。ソースドメインには「耳」は存在せず、またターゲットには「煙り」は存在しない。ブレンドにおける組織フレームにおいて両者が作用しあう。このような概念的統合ネットワーク・モデル (the conceptual network model) におけるブレンドスペースにおいて、われわれはターゲット・インプットスペースから投影された人間とその感情を見出し、またソース・インプットスペースから投影された対応する生理的反応（物理的な熱や爆発など）を、あるいはターゲット・インプット・スペースからメトニミーを通じて投影された感情の生理現象を見出すことになる。

“*He was so mad I could see the smoke coming out of his ears*” という文は直接ブレンドにおける構造を指し示しているが、ブレンドにおける推論―たとえば「煙は大いなる怒りのしるしだ」―はターゲット・インプット・スペースへの逆投影によってなされる―すなわち「彼は非常に怒っていたので（メトニミーによって）怒りの生理的兆候が見えていた。Turner & Fauconnier (2000) によるこのようなぶんせきは、感情のメタファーシステムの形成における生理的反応のメトニミーの果たす決定的役割を明瞭に示すものであるといえよう。

5.2 ブレンド理論における枢要な関係要因 (vital-relations) とその圧縮 (compression)

ブレンド形成の重要な機能は概念的理解に対して全体的な洞察 (global insight) を提供することである。言い換えれば、ブレンドとはある観念や想念を、まったく新しい形で見ることによって把握することを可能にする人間の創造的な技であるといえる。

Fauconnier and Turner (2002) は、概念ブレンドはわれわれが生きている世界の複雑性を「人間的尺度」(human scale) ―すなわち人間的経験の射程―に還元することによって、このことを達成するのだと主張している。ブレンドという写像プロセスがなぜわれわれの中で起こる

のか。 その理由を整理してみると以下のとおりである[8]。

人間的尺度 (human scale) を得ること。それは具体的には：
・拡散した物事を圧縮する (compress)
・全体的洞察を獲得する
・枢要な関係要素 (Vital Relations)（後述）を強化する
・ストーリー（話の筋道）を理解すること
・複数のものから単一のものへの還元

などが考えられる。つまりブレンドプロセスによって、われわれは多くの分散した出来事や経験について「意味づけ」をする方法を与えてくれるのである。次にブレンドプロセスにおいて重要な役割を果たす「枢要な関係要素」(Vital Relations=VR) について説明する。
複数のスペース間の写像において、同一化過程 (identification procedure) という、異なったスペースの要素の間の「マッチング」におけるコネクターはVRとしての機能を持つ。あるVRとは従って、二つの対応する要素や特徴を一致させるためのリンクである。ブレンドというプロセスは、異なったスペース間の対応物の間に成立する「距離を圧縮」し、あるいは「結びつきをより緊密に」する役割を果たす。異なったスペース間の関係は、「外- スペース関係」(outer-space relation) といわれるが、「圧縮」によってブレンドの中での「内- スペース関係」(inner-space relation) ―すなわち単一のスペース内部での対応関係―として表される。
ではどのようなVRにはどのようなものが考えられているのであろうか。Fauconnier & Turner (2002) でとりあげられているのは以下のとおりである：

変化 (CHANGE), 同一性 (IDENTITY), 時間 (TIME)、空間 (SPACE)、
原因―結果 (CAUSE-EFFECT)、部分―全体 (PART-WHOLE)、
表象 (REPRESENTATION)、役割 (ROLE)、類推関係 (ANALOGY)、
非類推関係 (DISANALOGYY)、特徴 (PROPERTY)、類似性 (SIMILARITY)、
範疇 (CATEGORY)、志向性 (INTENTIONALITY)、唯一性 (UNIQUENESS)

これらすべてについての詳しい説明はFauconnier & Turner (2002) にゆだねるが、ここでは本論のテーにかかわると思われるものについてのみ触れることにする。
・部分―全体 (PART-WHOLE) : インプットスペースにおける全体表現がブレンドにおいてその部分として写像される、あるいはその逆のプロセス。どちらにしても写像関係にあるインプットスペースとブレンドスペースの要素間の関係はもうひとつのVRである唯一性 (UNIQUENESS) に圧縮される。他の多くのVRの圧縮によって唯一性 (UNIQUENESS) は得られる。

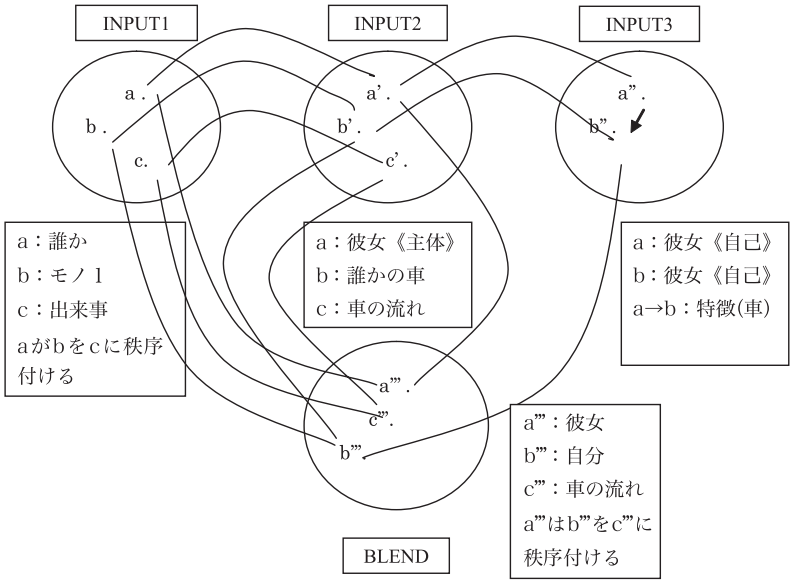
・時間 (TIME) : 記憶、変化、持続、同時性/非同時性および因果関係に関係する。
・空間 (SPACE) : 時間同様、ブレンドでは空間も圧縮されるケースが非常に多い。
・原因―結果 (CAUSE-EFFECT) :「製造者―製品」というメトニミーにおける関係などはこの部類に入る。一般に物事の因果関係について、その原因と結果の関係をスペース間の圧縮関係として捉える。その際、空間、時間、変化といったVRも同時に圧縮されることになる。
・志向性 (INTENTIONALITY) : 希望、願望、欲求、恐怖、信念、記憶など。

さて、この世名理論的装置を前提にわれわれのテーマである再帰表現のメトニミーについてブレンド理論による分析を試みてみよう。

上記 3. で確認したように、再帰代名詞のメトニミー機能は、隣接性に基づくものと部分―全体にかかわるものに大別され、その具体的なものは多岐にわたる。ここでは、例 (9) における空間の隣接関係と (11) における身体的全体―部分の関係を分析することにする。

(9) Elizabeth ordnete sich in den Verkehr auf der Sechsten Strasse ein.
（エリザベス（＝乗り物）は六番ストリートの車の流れに合流した。）

図 2 は (9) のスペース構造を示したものである。ここでINPUT 1 は「誰かが何かをある秩序の中に位置づける」という行為の関係図式、いわば鋳型、を表している。INPUT 2 は「Elizabethという主体 (Subject) が車を六番ストリートの車の流れに合流させた」という事柄を表しており、INPUT 3 ではElizabethの自己 (Self=alter ego) におけるメトニミー的内容が表されている。ブレンドにおける ”sich” という全体表現に主眼（プロファイル）が置かれ、同時にその本意（アクティブ・ゾーン）が ”sich” の隣接的関係にある「車」であることが見て取れる。(9) において表現されていない「車」はメトニミックな意味内容として、INPUT 3 において想定されており、ブレンドからの逆投影というプロセスによって、アクセスが可能となることによる。この場合圧縮プロセスは逆方向になり、「解凍」(decompression) というプロセスが生じる。

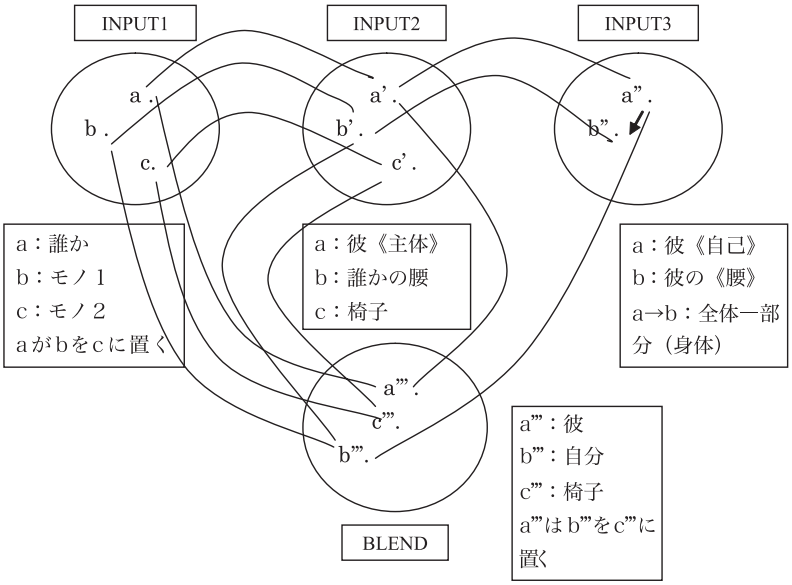


（図　2）

つぎに (11) のスペース構造は図 3 に示すとおりである。

INPUT 1 では「誰かが何かをどこかに置く」という行為の関係図式が表されており、INPUT 2 では「彼（主体）が誰かの腰を椅子に置く」という事柄が示されている。そしてINPUT 3 においてINPUT 2 の主体と同一の人間の自己とその身体的部分である「腰」が示されている。(9) のケースと同様、ブレンド・スペースにはそれぞれのINPUTから必要な情報がブレンドされ、「彼は自分（の腰）を椅子に置く」というどのインプットスペースにもない新たな概念構造が創りだされる。その際、INPUT 3 とBLENDとの間で圧縮されるVRは何であろうか。Fauconnier & Turner (2002) における上記のリストでは「特徴」(PROPERTY) がもっともふさわしいように思われる。所有物やコントロール化にあるものというのは大きな意味で「特徴」に帰属すると考えても無理は内容に思われる。「特徴」と同時にここでは「唯一性」や「空間」も圧縮されるVRとして考えられる。

(11) Er setzte sich auf den Stuhl.（彼は椅子に腰をかけた。）



（図　3）

再帰表現の他の事例についても同様なスペース構造を描くことができる。個別の事例によって、INPUT 3 におけるメトニミー関係と、ブレンドプロセスにおける圧縮の対象となるVRがそのつど変わってくるだけである。

(19) Die alte Frau widerholt sich in letzter Zeit.（老婦人は近頃繰り言を言う。）

たとえば、(19) での ”sich” と「自分の言ったこと」では「原因―結果」、「時間」、「記憶」などのVRが考えられる[9]。心理的側面のメトニミー機能を持つ (20) などでは「志向性」が問題になるであろう。

5.3　概念メタファー理論とブレンド理論

二つの理論には多くの最小点はあるものの、上記の事例の分析においても明らかなように、競合するものというよりもむしろ相互に補い合う関係にあると思われる。相違点としては中でもスペース間の写像とドメイン間の写像という点であろう。概念メタファー理論では、写像（とドメイン）が長期記憶に高度に定常的な知識構造として貯蔵されていると考えられている。それとは対照的に、概念ブレンド理論ではディスコースの進行とともに同時的に (on-line) 構成されるダイナミックで機動性に富んだ概念のひとまとまりのパケットのようなものとしてのメンタル・スペースを用いる。もちろん、定着したフレーズに関しては、このよう

なブレンド構造も定常的な知識として概念体系に貯蔵されることは言うまでもない。とくに注目すべき点は、概念メタファー理論が二つのドメインモデルであるのに対して、ブレンド理論では最低限４つのスペースによる概念の統合ネットワークが駆使され、その分内容に富んだ柔軟で創造的な概念構造を表すことができるように思える。

再帰表現におけるメトニミー関係について、概念メタファー理論では、あくまでもメタファー関係としてとらえられたに過ぎず、メトニミーに関しては見落とされていたというべきであろう。その点、ブレンド理論ではメタファー成立の影にすでにメトニミーのプロセスが用意されていることが的確に捉えられているように思われる。それを可能にするのが、まずブレンドにおける「新たな概念構造」(emergent structure) であり、さらに、インプット・スペースとブレンド・スペースの写像におけるVRの圧縮と解凍という認知的プロセスである。

6. まとめ

以上のように、英語やドイツ語における再帰代名詞を含む表現におけるメトニミー関係について、概念メタファー理論、認知文法、さらにはブレンド理論、それぞれにおける取り扱いについて比較検討した。これら三つの理論は、上記においても明らかなように、基本的には、表現の意味をその背後にある人間の経験や知識などといった認知的構造との関連で捉えるという意味で、決して反目しあうものでもなく、また競合するものでもない。むしろ、相互に補完しあう理論であるといえよう。本稿では最終的にブレンド理論におけるメトニミーの取り扱いの可能性について取り上げ、その総合性においてその優れた点に注目したわけだが、メトニミーに関するLangackerの認知文法におけるイメージ・スキーマによる分析は、アクセスなのか写像なのかという理論的違いはあるものの、何らかの形でブレンド理論の中に組み込むことができると思える。

稿を終えるに当たって、メトニミーのレトリックとしての性質をよく表した言葉として、瀬戸 (1997) から引用する。

「言葉は、適当なところで間に合わせている。「適当なところ」とは、比較明瞭な輪郭によって知覚上の優位を示す《外》にほかならい（「ヤカンが沸いている」における「ヤカン」《そと》と「お湯」《内》)。「適当な」《外》にとどまるからこそ、日常の言語生活はそれほど煩雑にならずにすむ。一種の歯止めといってよい。隅々まで追及の手が及んでいない言葉（人間）の怠慢は、逆に怠慢の効用とでも読んでよい効果を発揮する。これは、言語の経済という角度から見ても、納得のいく現象だろう。《内》は《外》にとって重要なものでなければならないが、その重要性とは、たとえば工学的な意味意での客観的な重要性ではなく、私たちの「生活世界」において現に感じられる主観的な重要性である, …どのようなものでも、日ごろ私たちはそのもののどこに注目し、どの部分に価値を見出しているかが肝心である。」(186)

「この適当なところ」というのがFauconnier & Turnerのいう「人間的尺度」(human scale) であり、それを表現する認知言語学的装置が枢要な関係要素 (VR) の圧縮 (compression) と解凍 (de-compression) なのである。

注）

1．人間名詞句（Human Noun Phrase）の名称は吉田（2003）からの借用。
2．吉田 (2003) からの間接引用。
3．Barcelona (2000, 12) からの間接引用。
4．Langacker (1993, 30) にも同様の趣旨の主張がなされていることをEvans & Green (2006, 315) が指摘している。
5．「主眼」という用語は瀬戸 (1997) からの借用。瀬戸においてもLangackerと共通する見地を認めることができる。
「全体で部分を表現するメトニミーの意味形成の過程を一般化して述べれば、：全体は、論理的には、述詞を媒介にして部分を指示する（筆者注：active zone）が、伝達の主眼（筆者注：profile, highlight）は、あくまで全体であって、部分でない。この種のメトニミーは、全他一途部分のこの二重性によって支えられた簡潔で力強い表現である。そして、メトニミートしての意味の相対は、全体と部分と述詞の三者の相互作用によって生み出される。その結果得られた意味は、表現主体としての全体の役割を反映して、必ず何らかの仕方で全体とのかかわりを示す。この総合的な意味特徴を《全体性》と呼ぶことにしよう。《全体性》という意味特徴は、ただし、全体で部分を表す類に限定されない」（瀬戸、1997, 186）
6．鄭 (1998) にメンタルスペース理論およびブレンド理論の要約があるので参考にされたい。
7．メタファーをメトニミーから由来するという考え方は理由のあるものであり、目とのミーのほうをより基本的なものと考えるのは正しい。Barcelona (2003), Radden (2003), Taylor (1995, 2003) らはすべてのメタファーはメトニミーから由来すると主張している。しかしEvans & Green (2006) は、primary metaphorは例外となるかもしれないと指摘している。またGoosens (1995) は”Metaphtonymy”という造語によって、メトニミーの根源性を分析している。
8．Evans & Green (2006, 418-) にまとまった解説があり、ここでも参考にした。
9．コミュニケーションのメトニミー機能に「原因―結果」の関係を関連付けることは、吉田 (2003, 19) の指摘による。

参考文献

Barcelona, Antonio, 2000. “Introduction. The cognitive theory of metaphor and metonymy”, in Barcelona, Antonio (eds), *Metaphor and Metonymy at the Crossroads a Cognitive Perspective,* Berlin・New York, Mouton de Gruyter, pp.1 -30.

Barcelona, Antonio, 2003. “Clarifying and applying the notions of metaphor and metonymy within cognitive linguistics: An update”, in Dirven, René and Ralf Pörings (2003), pp. 207-278.

Evans, Vyvyan & Melanie Green, 2006. *Cognitive Linguistics, an Introduction,* Edinburgh University Press Fauconner, Gilles, 1997. *Mappings in Thought and Language,* Cambridge University Press

Fauconner, Gilles, Mark Turner, 2002. *The Way We Think,* Basic Books

Goosens, Louis, 1995. “Metaphtonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Figurative Expressions for Linguistic Action”, in Goossens, L. et. al. (eds.) *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective.* Amsterdam, John Benjamins Publishing Company, pp. 159-174

Kövecses, Zoltán & Günter Radden, 1998. “Metonymy: Developing a cognitive linguistic view”, Cognitive Linguistics, 9-1: 37-77.

Lakoff, George, 1996. “Sorry, I’ m not myself today: the metaphor system for conceptualizing the Self” : in G. Fauconnier & Eve Sweetser. ed. *Space, worlds, and Grammar,* 1996, The University of Chicago Press. pp. 91-123.

Lakoff, George [and Zoltán Kövecses], 1987. *Women, Firre, and Dangerous Things,* Cicago. University of Chicago Press

Lakoff, George and Mark Turner, 1989. *More Than Cool Reason: A field guide to poetic metaphor,* Chicago. University of Chicago Press

Langacker, Ronald W., 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1. Theoretical Prerequisites,* Stanford, Stanford University Press

--------1993. “Reference-point constructions”, *Cognitive Linguistics 4.* pp. 1-38.

--------1999. *Grammar and Conceptualization,* Berlin, New York, Mouton de Gruyter

Radden, Günter, 2003. “How metonymic are metaphors?”, in Dirven, René and Ralf Pörings (2003). pp. 407-434.

Ruiz de Mendoza Ibanez, Francisco Jose 2000. “ The role of mappings and domains in understanding metonymy,’ . In Barcelona, Antonio. (ed.) pp 109-132.

Taylor , John, 1995. *Linguistic Categorization - prototypes in linguistic theory,* Oxford, Clarendon Press

--------, 2003. “Category extension by metonymy and metaphor”, in Dirven, René and Ralf Pörings (2003), pp. 323-348.

Turner, Mark and Gilles Fauconnier, 2000. “Metaphor, metonymy, and binding”, in Barcelona, Antonio (ed.): *Metaphor and Metonymy at the Crossroads: a cognitive perspective.* Berlin, New York, Mouton de Gruyter, pp. 133-145.

鄭基成、 1998,「アイロニーの認知構造」、茨城大学人文学部紀要『コミュニケーション学科論集』第 5 号、PP 3-15.

鄭基成、2006.「再帰代名詞の換喩、提喩、隠喩についての認知言語学的アプローチ：(その1)：換喩、提喩、隠喩の定義をめぐって」、茨城大学人文学部紀要『コミュニケーション学科論集』第19号、pp. 1-11.

佐藤信夫、1986.『レトリック感覚』、講談社学術文庫

瀬戸賢一、「意味のレトリック」、巻下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』、研究社

瀬戸賢一、1997.『認識のレトリック』、晦鳴社

吉田有、2003.「ドイツ語において人間名詞句が果たすメトニミー機能」、『上智大学外国語学部紀要第38号』、pp. 1-28.